菊池短歌会　11月詠草

時かけて菊の蕾のほぐれくる虚ろな吾に問ひかくるごと　岩木　妙子
雀らの軒端に遊ぶ影しるく声さはやかにカーテン透す　岩永　典子
文教の神とぞ仰ぐ重朋公みちびき給へ短歌の道を　氏岡　百枝
甲子園のヒーローもゐて賑はえり学校田の案山子軍団　梅田　昭子
礼拝堂より「光の子よ」と歌声のとほりてひびく秋の深みに　古賀　勝士
廃村にひかり降りつつ子ぎつねに人を恐るる気配もあらず　怒留湯健蓉
集ひたるはらから七人五百歳つつしみ申すいま父母上に　村上　咲江
白萩の残りの花も攫ひゆく分野一迅打つ手もあらず　山下　菊代
鉛筆にて奥の細道なぞりゆく「出かけない症候群」のわれの一刻　山代　静子
ここちよい秋の陽ざしに眠る犬大きい株に陣取りながら　余語やす子

万句の里俳句会　11月句会

老桜にたつた一つの返り花　田中　美智
心にも一つの節目冬に入る　吉井　綾子
影もまた透きとほりたる冬の水　北村　君子
初鴨の真つ新な水尾引きにけり　丸山美代子
赤々と大和の国の紅葉かな　岩木　敬治
庭の柚子ちぎりて搾る朝厨　打出　貞
見上げゐる頬の染まりし冬紅葉　野中　公枝
偲びつゝはや一と昔石蕗の花　隈部　輝子
初まりは蕾の多き菊人形　田島　房子
未だ沼に落ち着かぬらし鴨一陣　加藤　妙子
夕映えに更に燃えゐる紅葉かな　北村　妙子
初しぐれうれしき朝でありにけり　平山　邦子

肥後狂句桜会　例会入選句集より

新年会 今年の抱負語り合い　小川　繁美
心細さ あなたの居ない夜は嫌　荒木　玄海
新年会 弱音吐きよる胃肝臓　狩野　本六
心細さ 年金かじらるるばかり　高倉　新米
とんとつまらん 息子は嫁の言わるごつ　太田　雄三
新年会 キレイどころも呼うである　須藤　新生
心細さ 話相手は猫一人　窪田　明徳
雨の晩 そっと裏から来てはいよ　藤野　清子

とんとつまらん 手も握らずにお帰った　北村　竹刀
雨の晩 阿蘇は今頃雪だろか　光堀　善教
とんとつまらん 強盗にでん吠えん犬　藤由　藤紫
受験生 親はやきもきするばかり　安武　二山

泗水短歌会　11月詠草

ドライブに好みて履きし亡き夫の靴捨て難くしみじみ一人　平嶋きくえ
広辞苑に知識求めし日も遥か老いには重きが双掌に余る　福原美智子
桃栗三年柿八年柚子二十年とふまさに柚子なり色づきの見ゆ　藤本のり子
秋長けて流れ澄みたる町川に白鷺膨れ水鳥走る　吉安　永子
神風連ゆかりある楠まむかいにそよぎを仰ぐ入院の窓　内田つね代
十数年着らぬ着物の宝物秋空つづきに今日は虫干し　大島　きと
賑やかに囀づる雀吾が庭の大木樫のふところの中　宮本　峯子
大鯛の塩焼ほぐす箸いくつ歌声つゞき秋の夜は更く　髙藤タツノ
赤と黄の莟に花を連想したれと話そう菊と話そう　長尾はるみ

せせらぎ俳句会　11月例会

手抜きなど許さぬ夫の冬仕度　藤本アツ子
一陣の風が連れ来し初しぐれ　藤本　邦治
機灯いま着陸姿勢十三夜　坂本まつえ
吊橋の一歩一歩に秋の風　服部　静子
秋扇閉ずるが如く逝かれしと　五丁　義昭
今年来しは若き姿の尉鶲　村山　数恵
久に訪へば友のもてなす菊なます　寺本　和子
しぐれ空けふの日暮れのなほ迅し　内村　泊虹
もみじの木トンネルみたいに続いてる　（中一）渡辺　一史
自転車で後に消える白い息　（中一）渡辺　大寿

肥後狂句水笑会　11月例会

全然違う はよデジタルに替えなっせ　水　光
むげえもん 婦唱夫随て言われとる　三　水
むげえもん 年金は下げ税は上げ　左　党
別れしな 慌てて土産渡さした　英　坊
むげえもん 生きた魚ばさばきよる　五　女
むげえもん 医者とくすりが放されん　江　彩
別れしな よか気にさする店のママ　美　由
別れしな チクリと針ば刺しとかす　千　笑
全然違う こるが外車の乗り心地　乗　仏
勿体無ァ 期限過ぎたらすぐ捨てる　三　代
別れしな もう来なすなてのたもうた　好　茶

七城短歌会　11月詠草

登りゆく山路の杉に高きより赤色数個の烏瓜垂る　下川　つぎ
うす紅に樹陰染めゐる山茶花の花びら踏みつつ鶺鴒あるく　堀　甲子
遅植えで諦めゐたりさつま芋掘れば真紅の肌なし出てくる　木下　陽子
落日は山も川も野も吾も茜に染まる秋の夕暮れ　斉藤　芳子
落ち葉掻くそばえの庭に蒲公英の盛りの黄花が手を休まする　吉間　充子
日照りつづき枯死寸前の沈丁花晩秋の陽射しが追い討ちかくる　森　道子
「どうですか」と待合室で名も知らぬ声を掛けくる隣人ゆかし　岩崎　清継
連なりて九重大橋渡り間は紅葉愛でるゆとりなど無し　岩崎　照代
山宿の臥床にせせらぐ音の奥かじか鳴く声確かに聞こゆ　岩津　涼子

旭志文芸俳句会　11月詠草

北狐の足にまつわる秋の旅　中尾ヨシコ
この谷の奥に平家の里紅葉　芹川　蓉子
おしみなく夕日は包む櫨紅葉　出田みとり
子供達宮のぶらんこ秋の風　郷　ミヤ子
峡ぐらし田畑耕して冬に入る　芹川のり子
裏年も残しておくや木守柿　水谷　ミネ
ひこばえも雨に生きづく刈田かな　東　芳子
山道に木の実しぐれて小鳥呼ぶ　中山　栄子